ヒンドゥー教の奇祭タイプーサムinマレーシア

小塩 威*

ヒンドゥー教の祭礼タイプーサム**は、世界三大奇祭の中で、参加者個人の身体に最も過酷であると言われている。

私がJICAからの派遣でマレーシアIPOHに赴任していた2004年2月5日に、市内でタイプーサムが行われた。すでに15年前のことではあるが、見物した当時の生々しい記憶が鮮明に思い出される。その奇祭は粛々と受け継がれており、2019年1月21日にも行われたようである。

IPOH市は、19世紀、錫鉱業によって栄えた街のため圧倒的に華人系住民が多い。インド系住民は、僅か15%程度と聞いていたが、熱心なヒンドゥー教徒は多いようである。知人の兄が崇拝者として、タイプーサムに名乗りを上げたという連絡を前日に受けたので、同僚とともに、その崇拝者の祈願成就を追うことにした。

当日の朝7時過ぎ、市内を流れるKinta川の川岸に建つコンクリート床と屋根だけの建物の中に、崇拝者の青年は椅子に腰掛けていた。数ヶ月前からの食事制限や節制のためか、身体は痩せこけており、難行が果たせるか気になったほどである。崇拝者の周辺には、家族、友人、近所の人々の他、太鼓や拡声器を持った数人の楽隊など多くの人が集まっていた。また、一人の年配の男性が、崇拝者の身長の2倍ほどの長さで、直径15mmほどの金属棒を右手に支えていた。

やがて太鼓の音とともに儀式が始まり、崇拝者はお供物の前で祈り、舞を舞った。崇拝者が椅子に戻ると、金属棒を持った男性により左頬から右頬にかけて金属棒がゆっくり刺し通されていった。小さなうめき声が聞こえたようだったが、頬からの出血も無く、崇拝者は金属棒を両手で支えて立ち上がった。金属棒の左端には布切れを、右端には長い紐を巻き付けて飾ってある。再度、お供物の前で祈りを奉げたあと建物の外に出て再び激しく舞った。

行進前の舞い

舞っている時、両手で支えられている金属棒の両端の撓み具合から、金属棒は重い鉄の丸棒だと分かる。崇拝者の両足首には脚絆が巻かれていたが素足であった。家族、友人、楽隊らに守られながら、約3km先のヒンドゥー教寺院KallumalaiarulmiguTempleに向かって炎天下の行進が始まった。崇拝者は行進中、意識朦朧となり、付き添いの人に寄りかかったり、あるいは気を持ち直し元気に舞ったりして、約1時間かけて寺院に到着した。崇拝者への水分補給などは一切無かった。寺院の前で舞った崇拝者は、この時すでに神の域に達しているようで苦痛も無さそうに見えた。崇拝者の前には次々と参拝者が訪れ、崇拝者に向い手を合わせて祈っていた。崇拝者は、家族が用意してきたお供物のひとつを参拝者に手渡していた。

行進中、意識朦朧となる

行進中の舞い

寺院前の舞い

ほぼ同時刻に、その他の崇拝者たち数組も多くの人々に囲まれながら寺院に集まって来た。背中に大きなフックを数個引っ掛けている者、腹の周囲に幅広のベルトを巻き腹に突き刺した棒で頭上の大きな飾りのバランスとりながら練り歩く者もいた。

背にフックの崇拝者

重い飾りを支える崇拝者

崇拝者達は、家族の健康と幸せを祈願するのが主目的のようだが、中には妻への愛の形として見せる者、過去に犯した罪の許しを得て心を正したい者など様々であると聞いた。

寺院での参拝が長々と続くため、崇拝者の頬から金属棒を抜き取る様子は見ることができなかった。

すべての崇拝者は、タイプーサム当日より相当以前に身体に穴を開け、治療したものと思う。そして、家族、友人達による種々の援助によって、当日は身体から出血することもなく難行を果たし、祈願成就できるのであろう。

*こしお・たけし　JECK会員(茅ヶ崎市在住)　職歴:日鐵溶接工業㈱(1960-1997)　東京都立工業高等専門学校(1998-2002)　専門分野:溶接技術
JICA任地:マレーシア　所属:一般社団法人　溶接学会　終身会員

**タイプーサム(Thaipusam)Thaiはタミル暦月の名 pusamは星の名　毎年1月終わりから2月初めにかけて、満月の日に行われる。

JICA帰国専門家連絡会かながわ会報　第32号

【発　行】2019年3月31日　【発行者】JICA帰国専門家連絡会かながわ(JECK)　【編集委員会】福田 信一郎(編集責任)　大平 一昭　佐藤 満寿哉　小泉 由紀子
【事務局】横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜センター3F　URL：http://www.jeck.jp/　事務局長 大平 一昭 e-mail:ohira_k@hotmail.co.jp
【印　刷】㈱横浜リテラ 横浜市戸塚区上矢部町1965-4　URL：http//www.yokohamalitera.com/　e-mail：info@yokohamalitera.co.jp